

惜 別

藤本奈々子さん シ 5 平成 22 年

シ 6 松田秀雄

6 期の私が藤本さんにお会いした最初の印象は典型的な大阪の女性という感じでした。優しくても、押しがきいて、インタプリテーションには最適な人物でした。小学校の自然観察、淡路景観園芸学校の自然観察会にも何度もご一緒させて頂き、私は学ぶことが沢山ありました。

また大阪環境保全協会の理事としてテレビに出演し、インプリを紹介したのも好評でした。私が創設した、高等科では講師として、高等科の基礎も築いていただきました。

しかし、平成 18 年 6 月 2 日、インプリ科の旅行・仙台自然観察の旅の最中、裏磐梯で突然倒れられ、それ以降、残念ながら、再起はできませんでした。健康であったなら、現在のシニア自然大学の中心的存在であったと思います。

シニア自然大学募集案内に掲載

「仲間と共に」

子供達が巣立って自分自身のこれからを考えていた時、シニア自然大学の講座生募集の記事が目にとまりました。入学しての毎日は、自然の不思議や知恵に気づかされる授業、仲間との楽しい交流に1年間が過ぎていった。その後、研究部に入り、自然が発するメッセージを受け止め、その感動を自分だけのものとせず、他の人、特に子供達に伝えたいと、今日もリュックを背に飛び出していく。家族の理解に感謝しつつ、同じ志の仲間と共に…。



藤本奈々子(シニア5期)

久富東九郎さん シ 2 平成 28 年

シ 10 福嶋孝子

平成 15 年私はシニア自然大学の講座生でした。体験入学ということでインプリ科の見学に行きました。何かの樹木の説明をしている方がいました。木のことを何も知らない私は「うまく説明されているなあ」と聞いていました。その人が胸に付けている名札を見て、び、び、びっくり！なんと中学校の先生だったのです。それも担任と理科の先生だったのです。中学校を卒業してからお会いすることもなく、40 年以上もたったその時お顔を見てもわかりませんでした。でもお名前がわかったとたん若い時の先生のお顔が脳裏に浮かぶと確にお年は召していられしても間違いなく先生でした。

私は先生からみても覚えてもらえるような生徒ではありませんでした。特別成績がよいわけでもなく悪くもなく態度もごく普通の目立たない生徒だったからです。

インプリ科に入ってから「実は・・・」と中学校でお世話になったことを告白しました。案の定先生は覚えていないと言われました。インプリ科に入ってから私を特別積極的におしえるというようなことはありませんでしたが先生の性格でしょう、何か質問に行くと静かな声で丁寧に教えてくださいました。先輩の前で一番最初のインプリをした時「上手だったよ。」とこれまた静かな声で励ましてくださいました。

夏盛りの磯での自然観察の時、当時 80 歳近くになっておられましたが元気にリーダーを務めてくださいました。それもリーダーの務めとして下見にも行ってくさったとお聞きしました。まだ若い後輩たちが「暑くて暑くてしんどい。」と言う中、先生は平然としておられました。

インプリ科員は「久富さん」と呼んでいましたが、わたしはずっと「久富先生」とお呼びして「久富さん」と呼んだことはありませんでした。

風間実さん シ 8 令和元年

シ 10 福嶋孝子

私がインプリ科に入科した時の代表が風間さんでした。どしんと落ち着いた風貌と態度で、代表を務められる雰囲気を持った方でした。

その年度だったか翌年だったか、服部緑地へ行って、打ち合わせの時間の時のことでした。「うち（インプリ科）には慶弔の規定がない。つくる必要はないか？」と言われたのですが、インプリ科員から「この年で慶はないやろ。」「弔ばかりやな。」と第3者の声が聞こえてきましたが、この風間さんの発言を機に慶弔の規定ができました。

また、3 分間スピーチを提唱したのも風間さんだったように思います。3 分間スピーチは一時とぎれたこともあります。インプリをするときみんなの前で話す練習と 3 分という時間の長さを体感するため、今なお合同研修のときには行われています。

15 年史の編集にも編集委員として作成に色々なご意見をいただきました。

ある年、風間さんが忘年会の閉会の辞を担当されました。その最後の言葉に続いて「私は今年度で退科します。」と急に言われました。みんなはびっくりで言葉ありませんでした。そんな雰囲気は微塵も感じさせなかったからです。

みんなが引き止める気持ちに配慮して退科を 1 年延ばしてくださいましたが 1 年後お言葉の通り退科に至ってしまいました。

25 周年記念のコンサートで偶然にも私が座った席の前に風間さんが座っておられて再会を喜びました。とてもお元気な様子でしたがそれがお会いした最後になってしまいました。

得永好子さん シ 13 平成 26 年

シ 13 田伏博子

得永さんと私は花組 13 期卒業で、6 名が同期で入科しました。彼女は最初から、きちんと目的を持って入科されていたようでした。

インプリ科の人は皆とても優しい、特に男性が優しいと言っておられました。この暖かな環境の中で、取り組みも一生懸命、責任感、誇りを持って行動をしておられました。ただ他の人の思惑も顧みず突っ走るところがあり、頑固な面もありました。

入科 1 年目の秋、彼女のフィールドの一つである明石公園の観察会を新入科員 6 名でしようと、計画されました。本番の観察会後は魚の棚の明石焼きに案内したり、J R チケットの割引券のお世話もしたり、サービス精神も旺盛でした。

出前教室のリーダーに当たると、工作などは殆んど自分一人で準備されていました。大きなリュックは、はち切れんばかりにインプリ資料が詰まっていました。

忘れられない思い出があります。小林さん、得永さん、私と 3 人で「大阪町歩き」の下見に行った時のことです。

善福寺の門前に「傾城阿波の鳴門、巡礼歌の段」の母子の出合いの像がありました。それを見て、得永さんは観察会の時、ここでこの一場面を演じようと言うのです。口三味線は小林さん、娘役のおつるは得永さん、母親役のおゆみは田伏と配役も勝手に決めていました。夜にはその台詞が送られてきました。その後、顔を合わせると稽古をしましたが、結局これは観察会の時間切れで幻となってしまいました。

お別れの葬儀場の入口にピンクの着物に笑みを湛えた得永さんの遺影が置かれていました。一瞬誰か解りませんでした。得永さんと認識すると、嗚呼これは得永さんが私達を悲しませないための思いやりの写真なのだろうと思いました。得永さん有難うございました。